
Yusa Beats!

犬之神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Y u s a B e a t s !

【Nコード】

N 3 2 8 3 P

【作者名】

犬之神

【あらすじ】

音無と遊佐が奏でるストーリー

それがY u s a B e a t s

第一話 遊佐との会話

「ふう・・・疲れた。」

音無はつぶやく。あの野球大会後、（本編4話参照）ゆりの言ったとおりの死よりも恐ろしい地獄の罰ゲーム（まあ死んでるけど）をうけて大変疲れているのだ。現在は疲れのあまり一人屋上で寝そべっている。

にしても日向消えなくてよかったなと思っていると、屋上のドアが開く音がした。

（今は一応授業中だし・・・戦線メンバーか？）

予想はあたり金色の髪をした遊佐がいた。

「えと・・・確かガルデモの近くにいつもいる遊佐？だったよな？」

「ええ、遊佐です。野球お疲れ様です。音無さん。コレをどうぞ。」

遊佐は両手に持っていた150mlの二本の内一本のエアリアスを音無に渡す。

「お。サンキュー遊佐。」

いえ、お気にせずにといと遊佐は音無の隣に座り、エアリアスを飲み始める。

「にしてもなんで俺に？いや助かるけどよ。」

「・・・ええ、疲れているように見えたので。それだけ・・・です。」

遊佐は頬を少し染める。音無は頬を染める理由がわからず疑問といた感じの表情になる。

「こうしてすっかり話すのは初めてだよな。普段あんまり本部の校長室にもいないけど何してんの？」

「主に天使の観察にガルデモの裏方指揮官にとマネージャアををしています。」

「へー・・・観察に裏方指揮官に・・・マネージャア?!」

音無は仰天する。

「はい。曲の歌詞などの最終決定。確認などもします。」
「スゲーな・・・ガルデモの歌の歌詞は最終的には遊佐が決めてんのか。」

「とは言っても基本歌詞にOKを出すだけです。消えてしまった岩沢さんの歌詞はケチのつけようがありませんでした。ユイさんアレですが・・・」

謙虚気味に遊佐は言う。

「つつてもスゲーよ。遊佐ってスゴイんだな。」

「いえ・・・それほどでは・・・。」

また頬を少し染める。

「それに音無さんのほうがスゴイと思います。殆ど新人なのにリーダーシップを発揮していて行動力もあって・・・もう以前から戦線にいるようですよ。」

「んーこんな世界にいたりゃあそりゃがんばるしかないからなあ・・・死んだときの記憶もないからやることもないし。」

「記憶・・・やっぱり無いんですね・・・」

遊佐の顔に陰のある表情ができる。

「？」

突然携帯の音が鳴る。遊佐のかと音無は思ったがどうやらどっちもだったららしい。

二人は携帯を見る。そこにはゆりから一言。

『緊急会議。メールが送られた者はわが校長室に集まりなさい。』

(相変わらず偉そうな口調だなあ・・・)

音無はわずかに苦笑いする。

「いきましようか音無さん。」

遊佐が寝そべっている音無に手を差し伸べる。

「ん、サンキュ。そうだな、行くか。」

二人の手が触れる。またしても遊佐の頬が赤くなるが音無は気づいていない。

二人は校長室へと向かう。

音無は遊佐の陰のある表情を思い出して思った。

(遊佐にも・・・辛い過去があるってコトか)

なぜか、音無は遊佐の過去が異様に気になった。だが、聞いてはいけないと思い、考えをやめた。

二人は校長室へと進む。

第二話 遊佐アドバイス

校長室に着く。ゆりを含め見た目が目立つレギュラーメンバー（なんだそれは）が全員そろっている。めずらしくガルデモのひさ子に入江に関根もいる。

「お〜？遊佐と一緒に？いつの間に仲良くなっただ〜？このこの〜」日向が冷やかしかし気味に聞いてくる。その発言を聞いた遊佐は冷たく「相変わらず親父くさいネタかつ、ベタで寒い言い方ですね。なにがこのこの〜ですか。反吐が出ますよ日向さん。」

氷のように冷たかった。

「うおおおおお！！悪かった！俺が悪かったよ！寒いネタではありませんでした！後俺がいつも親父くさいみたいと言わないでくださいー！」

泣き叫ぶ日向を見てゆいは一言。

「アホですね！」

椎名も一言

「浅はかなり」

さらにTKも、

「Hinata is stupid」

英語が残念な日向は疑問に思い、

「・・・？なんていつてんだ？日向ってのは聞こえたけど。」

そこにクライストが説明する。

「訳すと・・・」日向は馬鹿だな”ですね。」

うおおおおお！TKまでもが俺を見下すのかあああ！と泣き叫ぶ日向を完全無視しゆりはいつもの校長室の椅子に腰掛けながら本題を話す。

「いい？近いうちにテストがあるわ。それについてを今日会議するわ。」

ゆりの一声と共に戦線メンバーが顔を引き締めて聞く。

（さすがリーダーだなあ・・・こういうのを本当のリーダーシップって言うんだぜ遊佐・・・？あれ。）

いつの間にか遊佐がゆりの隣に移動している。

「テスト・・・か当然参加しないのだろう？ゆりっぺ。」

野田が言う。

「いいえ今回は違うわそれは・・・」

話が進んでいく（ここらは本編と同じなのでカット）

よーするに天使に悪い点を取らそうZEという話らしい。そのため的工作人员は音無、日向、高松、竹山、ゆり、大山（本編と同じである）だった。

ゆりは言う。

「オペレーション・・・スタート！」

「ハア~~~~~」

音無は重くため息をつく。テストの日、何時間がたち、次の時間でテストは終わりだ。しかし、NPCの目をそらすネタが思いつかないのだ（コレも本編見ればわかる）

下手をすれば天井に飛ばされる。音無はそれを考えるために一人屋上で悩んでいた。

「借金取りから逃げているような顔ですよ。音無さん。大丈夫ですか。」

遊佐がさらっと酷いことをいいながら屋上にいた。

「よー遊佐か・・・いやネタが思い浮かばなくてなあ・・・」

「NPCの気を引くなら・・・ガルデモ関連のコトがいいと思われませよ。」

「！それだつ。サンキューな遊佐！そのネタなら飛ばされる必要もなさそうだ！」

音無は自然に遊佐の両手を自分の手で包み込み感謝をする。

「い、いえ・・・あの、そのそれよりも・・・て・・・てててて、手を・・・」

遊佐は顔を赤く染める。普段の表情からは考えられないほどに沸騰している。

「？ああ悪い。にしてもまた屋上だな？よくここに来るのか？」

「え、ええ。校舎全体の様子、天使の監視をするには屋上が丁度いいので。よくきますね。」

「そっか屋上に来れば遊佐にいつでも会えるようなもんか。それはいいな。今度から頻繁に来るようにするよ。」

「っ？！それはどういう意味ですか・・・」

「ん？いや遊佐ってこの間知ったけど話すと結構楽しいしさ。だからだよ。」

そ、そうですか・・・と遊佐は顔を少し赤くし、俯く。

キーンコーンカーンコーン

「っと・・・始まるな。それじゃあな遊佐ー。アドバイスサンキューな。」

「いえ、頑張ってくださいね。」

*

「はいいいテストを前に送って集めてくださいーい。」
ゆりは音無にアイコンタクトをする。

（やりなさい。音無君。）

（覚悟決めてやるか・・・）

音無は席を立ち、言った

「おーい！今聞いたんだけど今から体育館でガルデモがライブやるみたいだぜ！！」

ホント？！行こうぜー！行くかー！行こうよー

と次々とNPCが体育館へと行く。

「なに・・・またガルデモかっあいつらっ！！」

NPCの教員も生徒を追いかけ、残されたのは戦線メンバーのみ。

天使も行ってしまった。竹山はその隙にさっさと天使のテストに細工をする。

「すごいよ音無君！」

大山が尊敬の念を込めて言う。

「くっ……そのネタがありましたか。脱ぎ損ですね……。」

高松は悔しそうに言う。

「スゲーよ音無！完璧だぜオマエ！」

「よくやったわね音無君。けど……。」

「けど？」

全員が言う。

「やっぱり飛ばすわね日向くん」

ドゴオオオオツ！！！！

日向が天井へと突き刺さる。

「な……んで……だ……。」

「えっとねーどうせ音無君失敗するだろうからまた日向君飛ばせる
と思ったんだけど飛ばせなかったから飛ばしたのよー」

「ふざ……け……。」

日向から動きが消えた。

それを眼中にもいれず音無は思った。

(サンキューな遊佐……。)

第三話 遊佐ハイキング

「ふああゝ・・・暇だな」

男子寮で音無は一人つぶやく。今日は珍しく戦線の活動もない。ゆりが言うには、たまには休んでおけとの一言だった。

「あのゆりが休め・・・ねえ。休めって言ってもゴロゴロするしかないんだけどな。」

コンコン

ノックがした。

「あいてるぞー」

「失礼します。音無さん。遊佐です。」

「遊佐か。この前の件はサンキューな。」

「いえいえ。役に立てたなら嬉しいです。」

「で？どうしたんだ遊佐？」

「えと、音無さんこれから少し時間がありますか？
頬を少し染め、遊佐は聞く。

「時間も何も暇すぎて困ってたんだ。どっか行くのか？」

「ええ、あの、よければ一緒に森まで出かけませんか？」

「森？ここって学園しかないんじゃないのか？」

「森はなぜかあるようです。松下五段さんが山籠りにも使っている場所です。」

「いいけどそこへ行って何をするんだ？」

「ハイキングです。たまには息抜きも必要かと。」

「いいな。よし行くか！出発はどーする？」

「ほ、本当ですか？嬉しいです。準備は音無さんができればいつでも行けますよ。」

よく見ると遊佐の後ろにはハイキングに必要なものが詰めこまれたバッグがある。

（断られたらどうするつもりだったんだろう・・・）

音無はわずかに苦笑いをした。

「んじゃ行くか。こんな世界じゃ俺なんにも持ってないし。」

「はい。じゃあ行きましょう。」

こうして二人の楽しいハイキングが始まった。

山を登り続けて10分、遊佐はなにかを発見した。

「見てください音無さん。蝶々ですよ。」

「キレイだなー。ってあれ？この世界に人間の姿のNPC以外もいたのか？」

「おそらくNPCと同様に、この世界を作った者が雰囲気作りにと作ったのではないでしょうか。」

「なるほどなー動物のNPCもいんのかな？」

「いるんじゃないんですか？ほら、あそこに熊みたいなのNPCが。」

遊佐が指差す方向300メートル先に熊みtainなNPCがいた。

「………。」

「……なんか走ってきますね。」

見るとくまは全速力で走ってくる

「逃げるぞ遊佐あああああつ！！！」

「え、あ、はいっ！」

音無は遊佐の手を握り全速力で走る。

数十分後、音無と揺さは大変なピンチに陥っていた

（クマから逃げるために茂みに隠れた方がいいが……畜生……どうする）

茂みの周りには熊がいて、少しでも声を出せば気づかれるのは間違いないなかった。

遊佐は声を出さないように音無に口元を手でさえぎられている。

（お……音無さん……手……が）

遊佐は顔を一気に赤くする。

（！悪い……けど我慢してくれ。少しでも声を出したら終わりだ……）

（は……はいいい……）

そのとき熊が突然、茂みのほうに向かってきた。

(まずっ・・・！バレたか・・・？！)

茂みまであと数センチ、そのとき！

「おーい五郎。飯だぞ。」

松下五段がいた。そして熊に向かって言った。

すると熊は松下五段のところへと行き、去っていた。

一人と一匹が去っていった後、音無は叫ぶ。

「なんでNPCをなつかせてんだよ！なんで五郎だよーっ！」

「・・・音無さん。もう誰もいないのに叫ぶのはどうかと。」

「そうだな・・・行くか頂上。逃げてるうちにもうすぐそこだしな」

頂上へとついた

「！キレイだなー・・・」

頂上からは絶景の景色が見れた。

「そうですね・・・ではお弁当でも食べましょうか。」

「この世界で食料の材料なんてよく手に入ったなー」

「ええ、学食から盗んできました。」

「おいっ！」

「別にいいじゃないですかこんな世界なんですし。」

「まあそうだな。じゃあ食うか。」

弁当はいろんな種類のサンドイッチ。女の子が作った雰囲気がよく

出ていてとてもおいしそうだ。

「んじやいただきましたまーすつと。」

音無は食べ始める。遊佐はその様子をじっと見ている。

「これは・・・！」

「ど。どうでしょう・・・か？」

「ウマイっ！遊佐オマ料理うまいんだな？」

「い・・・いえそれほどでは、でも嬉しいです。たくさん食べてく

ださいね。」

モグモグと食べる音無を見て遊佐は微笑む。

「ふーウマかったぜー」

「それはよかったです。」

「それと・・・音無さんまた明日は時間ありますか？」

「ん？多分あるけど。」

「じゃあ明日も・・・部屋に行っていていいですか？」

「ん。いいぞ。」

「ありがとうございます！」

遊佐との物語は始まっていく・・・

第四話 遊佐の思い

「ん……そろそろか。」

遊佐と約束した時間まであともう少し。昨日の出来事を音無は思い出す。

*

『で？いつごろくるんだ？』『今日と同じ時間くらいがいいのですが……大丈夫ですか？』

『ああ、いいぞ。何するんだ？』

『いえ、明日は話を聞いてもらいたいです。音無さんに。』

『そうなのか？そりゃなんなんだ？今ここでじゃ駄目なのか？』

『はい……明日じゃないと駄目なんです。』

『そうかわかったよ。』

(なんなんだろうな……一体。)

コンコン、ドアからノックが聞こえる。

「遊佐か？開いてるぞ。」

「失礼します、音無さん。」

「ん、適当に座っていいぞ。」

ハイ、と頷き遊佐はちょこんとちゃぶ台の近くの座布団に座る。

「で？話つてのは？」

「ハイ、その、んう……えと実はその……」

いつもの冷静沈着な遊佐に似合わず、言葉は途切れ途切れになり、顔も赤い。

しかし、調子を取り戻し、顔を赤くしながらも音無の目をまっすぐ見つめて。

「音無さん。私は音無さんのことが好きです。初めて会ったときからずっと好きでした。」

言った。思いを全部吐き出した。

音無は遊佐と出会ってからの日々を思い出し、一つの答えにたどり着く。

（ああ、そっか。俺も遊佐が好きだったんだな・・・）
そして言った

「俺も遊佐が好きだ。」

直後、驚いたような顔をした後、遊佐は嬉しさのあまりか涙を流す。

「嬉しいです・・・音無さんっ・・・」

「遊佐っ・・・」

二人は口付けを交わす。

この日、死んだ世界戦線初のカップルができた

第五話 遊佐の過去

遊佐と音無が付き合い始めてから数日、(この間に直井の件などがあつた。)二人はバカツプル振りを見せ、今日も屋上で二人で弁当を食べていた。

「音無さん。あーんです。」

右手に持った箸で卵焼きをつまみながら遊佐は言う。

「ん、モグ・・・相変わらず遊佐の弁当はうまいな。」

遊佐が音無の口に卵焼きを運び、音無は口にする。

「そつえば音無さん、まだ記憶は・・・?」

「だめだな・・・名前もわからない、早く俺の名前遊佐に呼んでもらいたいんだけどな。」

「そうですね、私も音無さんの下の名前を呼んでみたいです。」
頬を染めながら遊佐は言う。

「だな、そつえば遊佐は下の名前は遊佐なんだっけ? 苗字はなんなんだ?」

「苗字はないです。」

「覚えてないってコトか?」

「ええ、はい、そうです。」

一瞬遊佐の顔に曇りが見えたがすぐに消える。

(苗字の件についてはあんまり触れないほうがいいみたいだな・・・)

そう考えてると屋上のドアが急に開く、ゆりと直井だった。

「音無くん、記憶を蘇らせるわ、きなさい。」

「?! どういうことだゆり?」

音無は驚く、その様子に直井は説明を加える。

「僕の催眠術で音無さんの記憶を蘇らす事ができるかもしれないんです!」

「そう、だから今から空き部屋教室に行くわよ。」

「ゆりっぺさん、私も行つては駄目でしょうか？」

遊佐がゆりに目を合わせ言う。

「そうね、遊佐さんはいたほうがいいわ、壮絶な記憶だった場合音無さんの記憶の傷を癒せそうだしね。」

*

教員棟3階空き部屋

「………初音っ……！」

数十分後、音無は記憶を取り戻した。しかしその記憶はゆりの予想通りかなりの壮絶な記憶だった。

「……直井君行くわよ。」

ゆりは直井に一声かけてから教室を出て行く折、遊佐に小さく告げた。

「音向くんの傷を癒せるのはアナタだけよ、遊佐さん、後は任せろわ。」

直井もゆりに続き遊佐にすれ違いざまに言った。

「悔しいが今の音無さんを救えるのは貴様だけだ、遊佐。音無さんを……頼む。」

音無の役に立てないことを心底悔しそうにしながら直井も出て行く。音無はパイプ椅子に座り、ボロボロと泣いている。

「音無さん……ん……。」

遊佐はパイプ椅子に座ったままの音無を優しく抱きしめる。そしてそのまま唇を重ねる。そして離す。

「俺は……何も成し遂げれなかった……初音っ！」

「そんなことはないですよ……その件以外で……音無さんは生前成し遂げたことができました。」

「……？」

「音無さん……私音無さんに会ったことは生前にもあるんですよ？」

「え……？」

「会ったと言つても……音無さんは覚えてはいないと思います。」

「・・・」

「そのとき、私を救うという事を成し遂げたんですよ。音無さんは。」

「

「いつの話・・・なんだ？」

「そうですね、話します。あれは死ぬ少し前の事でしょうか・・・。」

「

遊佐の過去が今、明かされる。

第六話 遊佐の生前

生きていた頃、遊佐は親がいなかった。捨てられたのか、死んだのかもよくわからない。気づいたら、ある森の入り口付近にある施設に入れられていた。施設の人は何も教えてくれなかった。

名前は苗字にもなり、名前にもなる遊佐と決められた。

遊佐は親がいらないことは気にしていなかった。生まれたときから親がいなかったから、親というものがどういうものかもわからなかったし何より施設の仲間たちがいてくれれば遊佐はそれでよかった。とある日のこと。

「バーベキューですか？」

遊佐は聞き返す。

「うん。今日でこの施設ができてから10年だからね。パーティ的な感じでやろうと思うんだ。」

言ったのは施設の施設長の国枝さんだ。50歳前半の優しい感じのするおじさんだ。

「そうですか。それで？」

「うん、遊佐ちゃんに買い物を頼まれて欲しいんだよね、材料の。」

僕と他の業務員の人はこの子達の世話もしなきゃいけないし、遊佐ちゃんが一番年上さんだしね。」

そうしてるうちにも国枝の周りに他の子供が、遊ぼうー、国枝さんなどといったっている。

「いいですけど、まるで私がおばあさんみたいな言い方ですね。」

遊佐はジト目で国枝を見る。

「はは、違うよ。遊佐ちゃんを頼りにしてるのさ。」

「まあいいですけどね。」

「はは、はい、これ材料のリストね。」

一枚のメモ切れを遊佐に渡す。

「行ってきます。国枝さん。」

「行つてらつしゃい。遊佐ちゃん。」

遊佐は歩き出す。

(バーベキューですか・・・いいですね。)

遊佐は笑いながら森を降りて商店街へと行く。

*

一時間後、遊佐は買い物済ませ帰路へとついていた。

「それにしても重いですね。国枝さんは女の子にこの量を持たせるとは結構な鬼畜さんなのでしょうか？」

両手いっぱい袋を持ち、適当な毒舌を遊佐は吐く。

そんな愚痴を一人で吐いてるうちに、森へと近づく。

「・・・？」

遊佐は異変に気づく。森の入り口付近に救急車が止まっており、森の所からは煙が

「まさか・・・っ!？」

遊佐は駆け出す。持っていた袋を捨て、早く施設へと行くために。森に入り、施設へと近づく。施設へ駆ける。

施設は炎で燃えていた

「なん・・・で・・・？」

遊佐はその場に座り込み呆然と燃えている施設を見る。

遊佐の近くに救急隊員らしき人物が駆けてくる。

「君・・・この施設の子かな・・・？」

「はい・・・。なんで・・・なんで・・・燃えて・・・るんです・・・か？」

「火の出所はわからない。けれど自然に起きた火じゃないと思う。」

(放火・・・？なんでっ・・・!?)

「皆は・・・皆は無事なんですか!？」

救急隊員は顔を背ける。

そして同時に、遊佐はあるものを見てしまった。

救急車に運ばれていく男の人。それは

施設長、国枝だった。

全身が焼け爛れていて、顔もよくわからないが体型で遊佐にはわかった。まちがいなく国枝だ。そう確信したとき、遊佐の中の何かが悪れた。

「いやあああああああああああああああああああああああああああ
あつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そのまま遊佐の意識は途絶えた。

*

あの日から数日、施設の人間は全員助からなかった。遊佐は行き場所と仲間を失ったことで完全に希望を失っていた。

(皆のところへ行こう……。)

遊佐は電車の駅のホームに立っていた。

そして、遊佐はホームの向こう、電車が走る線路へと足を進めようとする。

(さようなら)

タンツ……

足を踏み出す。しかし、足は進まなかった。右腕を誰かにつかまれているのだ。オレンジの髪の色をした青年だった。受験票らしき物を左手に持っている。

「何を……するんですか？」

青年は答える。

「アンタ、今死のうとしてただる。」

「それが……？あなたには関係ない話でしょう。」

「関係ねえわけあるか馬鹿！なんでまだ生きれんに死のうとするんだ！なんでそんな事をしちゃうんだ！」

青年は泣く。なにかを思い出しているかのように。しかし遊佐にはそんなことは関係ない。

「理由ならあります……。私の大切な人たちが死んでしまったんですよ。全員、ね。私にはあの人たちが全てだった！生きる意味が

ないんですよっ！もう希望も全部なくしてしまっただんですよっ！」
遊佐は顔を涙でぐしゃぐしゃにする。二人の声がホームに響く。

「オマエの気持ちはわかる！俺も大切な人をなくした！心が痛かった！辛かった！けどな、だからって俺たちが死んでイイハズがねえ！オマエの大切な人たちはオマエに死んでもらいたいなんて思ってるハズがないっ！」

「それでも生きる意味がないんですっ！私にはもう誰も頼れる人がいない！友達も全部消えてしまっただんです！」

遊佐は思いを吐き出す。

その瞬間、青年は遊佐を強く抱きしめる。

「な・・・？」

遊佐は困惑する。

「なら俺がオマエの生きる意味になってやる！友達にだってなってやる！だから死ぬな！生きるんだ！」

「う・・・あ・・・ああああああ！」

遊佐は泣き喚く。新たな味方ができたことに、生きる意味を再び取り戻す。

*

30分後、遊佐と青年は駅の中に取り付けられてる喫茶店にいた。

「落ち着いたか？」

「ええ、ありがとうございます・・・。えと・・・。」

「ああ俺は音無だ。これから友達なんだから名前ぐらいしらねーと話になんないよな、ははっ。」

「ふふ、そうですね。ありがとうございます。そしてこれからよろしく願いますね音無さん。ちなみに私は遊佐です。」

「そっか。よろしくな。」

「ところで音無さん？受験票を持ってたって事は、受験大丈夫なんですか？」

「ん？ああ大丈夫だ。落ち着かなくて早くに行こうと思ってただけ

だからな。」

「そうなんですか。」

「けどそろそろヤバイな。悪いな遊佐、いきなり。これ俺のメールアドレスと電話番号と住所と家の予備の鍵だ。困ったら使ってくれ。」

「あ、はい。」

「じゃあ俺はもう行くけど、もう死のうとするなよ？」

「はいっ大丈夫です。また会いましょうね、音無さん。家に早速行かせてもらいます。」

「おうっまたなー遊佐！」

音無は喫茶店を出て、駆けていく。

それが音無と遊佐の始めての出会いだった。

*

「そうだった……。でも結局俺はあの後死んじゃったんだよね……。ごめんな。一人にもあの後しちまった。」

「いえ、私もあの後、死んでしまいました。それに今思い出してくれたんですしいいです。」

「そうか……。なあ遊佐？」

「？」

「あの時は言い忘れたけど、俺の名前は結弦だ。そう呼んでくれ、遊佐。」

「はい……。結弦さん。」

「一緒に、この世界でがんばろう。神に抗おう。遊佐。」

「はい、結弦さん……。」

音無は誓う。神に本気で抗うことを。

第七話 遊佐の嫉妬（前書き）

神に本気で抗う事を決めた音無は、大変なピンチに陥っていた。
それは……？

第七話 遊佐の嫉妬

過去の事を思い出し、遊佐と神に本気で抗う事を決めた音無と遊佐。そんな二人は今、体育館の近くの自販機前にいた。

そして、音無は人生最大のピンチに直面していた。

「それで……どうゆうことなのか説明してもらえると嬉しいのですが、結弦さん」

「……えーっと、その……あの、遊佐……？まずはその右手に持っている銃を下ろして欲しいんだが……いや、下ろして欲しいのですが……」

無表情ながらも声に怒を混ぜながら、言う遊佐。そしてその右手の銃が怖すぎて、否、今の遊佐が銃も含めて怖くて思わず敬語になる音無。

なぜこうなったのかを思わず、走馬灯のように思い出す音無。それは10分前の出来事……

「ふ……、相変わらず旨いなあ。カンドウリトバスサイダー」

自販機でジュース、カンドウリトバスサイダーを買い、自販機の前で一口飲む音無。

「なんだろうな、なんかサイダーだからか涙腺にシヤキツとくる感じがして、そこから広がってく妙な甘さがたまんねんだよなあ。」

この世界じゃ俺にとっては遊佐の次ぐらいに癒しの存在だな」

その遊佐は現在ここにはいない。自販機でジュースを買いに行くとき、遊佐に、私も行きましようか？と言われたのだが、断った。いや、そういつてくれて嬉しかったは嬉しかったんだけど。なにせ……

(……何故かペットボトルにゲームかなんかの美少女キャラクターみたいなのが描かれてるからなあ……。コレ見たら遊佐、ドン引きす

るだろうしなあ、まあ遊佐じゃなくてもドン引きするだろうが。嫉妬は……するわけないか、自惚れすぎだなそれは)

そう思いながらグビグビとサイダーを飲んでいく。やがて、中身が空になり、ペットボトルが軽くなる。

「あ……旨いなあ本当に。……もう一本買うか」

やばいなあ、このサイダーだけで成仏したりはしないだろうな？とか思いながら、空になったペットボトルをゴミ箱に入れ、新しいカンドウリトバスサイダーを買い、自販機から取り出そうとする。

「あつれえー音無さんじゃん！遊佐うちと一緒にじゃないんだあ今日は」

「せ、関根っ!?!」

ペットボトルを取り出そうとしたとき、突然関根の声が聞こえたので、自販機のペットボトルが出てくるところに、再びペットボトルを戻す。

(ま、まずい……。二次元美少女の絵が描いてあるペットボトルなんて関根に見られたらお終いだ！以前日向に聞いたがコイツはお喋りらしい、絶対にバラされる！)

「よ、よう関根……。てか……音無さんて、お前俺より年下だったのか？」

とりあえず、当たり障りの無い話題をしながら、隙を見て自販機から素早くサイダーを取り出そう……。と考え、適当な話題を振る。

「うん、そだよー。まあ敬語は苦手だから使わないけどね。てか気づかなかったん？ほら、私ひさ子さんって呼んでるじゃん。確か音無さんはひさ子さんと歳同じでしょ？なら一応さん付けもしいとね」

短い質問に、少しばかり、長い回答。うん、お喋りは確定だな関根は……絶対にばれんようにしないと！と考えた音無は、再び適当な話題を出す。

「へ、へえ、そうなのか。で、どうしたんだ？ガルデモの練習教室の方向から来たっぽいけど、練習終わって帰るところか？」

と、少し大きめな声で言う。……ど、どうするよっ俺！？と、止めたいけどこの先どうすりゃいいんだっ！？畜生っ！神様は信じれないし、誰か、誰か助けてくれー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「結弦さん？まだジュースを買ってたんですか？遅いので心配しましたよ……」

心の中で、叫ぶ音無の背後の方から、声が聞こえ、やがてそれは途切れる。その声は、音無の恋人である遊佐。

「ゆ、遊佐っ！？あ、ああ悪いっ。ちよつと選ぶのに時間がかかったまっつてな……」

や、やばいっ！ペットボトルを最も見られたくない奴がっ！？どうするっ！と思いつながら、関根の肩をガツシリ掴んだまま、何故か言葉が途切れた遊佐の言葉に応答した音無。

しかし、遊佐の表情を見た途端、音無の言葉も途切れる。なぜなら、その顔は、無表情でありながら憤怒の色で染まっていたからだ。

「ど、どうしたんですか遊佐さん？か、顔が七つの大罪の憤怒イラに染まってますよ？」

ああ、なんか訳がわからないけどあまりの怖さに条件反射で敬語になっちまった！一体どうしたってんだ？

やがて、遊佐は左腕の人差し指を音無の正面へと指して言った・

「……それは、何ですか？結弦さん……」

「へ……？それ……？」

な、何だっつてんだ？正面、正面なんか何も……

「えと、音無……さん？」

「……」

正面には、顔が真っ赤に染まっている関根がいた。俺が肩をガツシリと掴み、それを上目遣いなぼうつとした目で見てくる様はまるでこれからキスでもしようとするかのような……

正直に言おう。

「や、えつと……実はだな……」

全てを正直に話し終え、遊佐の表情を伺う。やっぱりドン引かれてんのかなあ……と思ったが、遊佐は呆れたような顔で口を開く。

「はあ、ようするに二次元美少女の事がバレたくなかったからあんな事をしてたんですか……？」

「あ、ああ。だって遊佐には引かれなくなかったしな……。遊佐に引かれたら俺は立ち直れない。大好きな人に引かれるのは辛いだろ？」

ポカッ

「いてっ」

そう告げた俺に軽く頭を叩く遊佐。微妙に痛い。そして一言優しげに言う。

「馬鹿ですね、結弦さんは……。そんな事で引くと思ってるんですか？そもそも、好きな飲み物が偶然そういうのが描いてあっただけでしょう？引きませんよ」

「……遊佐、ありがとう……な」

「いえ、そ、それに……」

「？」

「わ、私の為を思って……だったんですよ？そ、それならいいです……、嬉しいですから……」

「遊佐……」

「は、はい、なんですか結弦さ……むぐっ！？」

頬を赤くしながら嬉しい事を言ってくれる遊佐に、思わず口付けをする。それを何度も繰り返しながら、俺は思った。

（そっだよな、何馬鹿みたいな事考えてんだよ俺は……？そんな事で俺達が嫌いあう訳あるかよ……？ずつと……一緒だ）

そのまま、更に口付けを続けていく。

その頃……ガルデモ練習教室

「飲み物買って来いよー……」

「す、すいませんひさ子さああああああああああん！
でも色々あったんだから仕方ないじゃないですかあああああああ
あああああああ！？」

「あははは……。どんまい、しおりん……」

「アホですね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3283p/>

Yusa Beats!

2011年1月12日20時25分発行